特定非営利活動法人 シビルNPO連携プラットフォーム

CNCP通信 Vol. 9

平成 27 年 1 月 13 日発行

巻頭言

住宅地の再生プロジェクト

シビル NPO 連携プラットフォーム　代表理事　**山本　卓朗**

土木学会 100 周年事業の一つとして、CNCP：シビル NPO 連携プラットフォームを立ち上げたが、それと並行した記念出版として、土木世界におけるサードセクターの活動の意味や重要性、さらにはその実態や将来への展望を提示するべく「インフラまちづくりとシビル NPO～補完から主役へ～」を刊行した。

本書の中で、シビル系 NPO 法人の中間支援組織を立ち上げるべく協働してきたおよそ 40 団体（いずれも NPO 法人）のジャンル別事業を見ると、まちづくり、環境、社会資本の維持管理、防災減災、国際貢献、教育・技術継承など多岐にわたっているが、まちづくりがおよそ４分の１にのぼっていて、まちづくりが主要な活動領域であることがはっきりと示されている。

一方、新しい公共・共助社会をささえるいわゆるサードセクター（産学官の枠組みに“民”が加わる）は、単に NPO を指すものではなく、一般社団法人から PTA、婦人会、自治会町内会まで幅広いボランティア団体を含んでいると考えられている。偶然ではあるが私は、千葉県のさる戸建ての住宅地で自治会長を引き受けており、開発から 20 年を経過して高齢化などの課題が出始めている住宅地の再生プロジェクトに関わっている。その概要を少し述べるが、住宅地の諸活動がシニア中心のボランティアで支えられているところが、CNCP の役割を議論するうえで、何らかの役に立つのではと思っている。

当住宅地は季美の森（きみのもり）という名で多少は知られているゴルフ場と一体開発されたところで、既に主要な開発が終了し、販売センターも閉鎖されるなど、住宅地の諸課題への対応がほぼ完全に住民ベースに移ってきている。高度成長期に開発された大型のニュータウンや高層団地群が半世紀を経て、高齢化・老朽化のみならず多くの課題をかかえて、手を打たないとゴーストタウン化するとして社会問題になっている。そして、戸建て 1500 軒の当住宅地も 30 年が目前になり、同様の成り行きが危惧されるため、ミドル層を巻き込んだ将来ビジョンワーキングチームを公募して議論を開始したところである。そのきっかけは、開発会社が販売戦略の一環として主導してきたプール、ジム、テニスコートを有する住民向けスポーツプラザの 20 年という利用契約終了と廃止が目前になって、にわかに住民の危機意識が高まったことによる。

住宅地のコミュニティ活動は、参加率９９％を越える６つの自治会（細分化したブロックから１年交代で役員が出る）が、防犯交通安全、ゴミ集積場の管理から広報そして年数回の街の一斉清掃や夏祭りまで義務的な用務をこなしているが、その多忙さに現役世代からしばしば悲鳴が上がり、シニア層のさらなる参加が要望されている。一方、サークル活動としてシニア会があり、芸術系能、囲碁麻雀から歩く会・ミニ旅行まで 300 人を超える参加があるが、マネジメントの出来る人材は不足気味で、団塊世代からの補給が効かないことが悩みになっている。シニア会とダブル形で、課題解決（例えば、沈滞している敷地内スーパーへの支援や季美の森を活性化するための様々なイベントなど）に特化した行動派サークルがめざましい活動をしているが、ここも 70 代シニアが中心で５年先を心配している状況である。

いわゆるサードセクターの人材問題を具体的に述べるために、長々と引用したが、現役の雇用年齢が深刻な人手不足を反映して 65 歳まで延びている中で、さらなる成熟シニアのサードセクターへの参画を如何に進めるかが深刻な課題であることを実感している。多くの人材がいることは分かっているが、“参画”してもらう術（すべ）が未成熟なのである。

CNCP 設立のきっかけは、平成 19 年に土木学会教育・企画人材育成委員会のもとに設置された「成熟したシビルエンジニア活性化小委員会」の議論に始まる。CNCP のシニア人材育成活動はまさにこれからである。